

邵 雍 (しょうよう) (1011~1077)

宋の人、その先は范陽の人。父に従って共城（現在の河南省新郷市輝縣市）に徙り、後 河南に遷る。字は堯夫。諡は康節。

図書先天象数の学を、北海の李之才より受け、易に精通す。文王の著した易を後天易、伏羲の著した易を先天易として、先天卦位図を作る。

蘇門山百源上に読書す。河南省輝県の西北。上に百門泉がある。

三十代に富弼・司馬光・呂公著 等と洛中に從遊し、其の居を安楽窩といい、自ら安楽先生と號す。其の学派を百源学派という。

仁宗 嘉祐 (1056~1063) 及び、神宗 熙寧中 (1068~1077) 官に、推薦せられたが、任に就かず。卒年 67 歳。孔廟に從祀せらる。

著に『觀物編』『漁樵問答』『伊川擊壤集』『先天図』『皇極經世書』がある。その詩風は、あくまでも「道学」を中心としたために、詩の情緒に乏しく、声律をおろそかにしていると非難されるが、宋代初期に「道学」に詩を持ち込んだ詩人として特記される。(石川忠久評) 宋の哲学者たちの命題のひとつ→古代的な樂觀の回復

儒家の説く古典 →人間の運命より、人間の使命をより多く説く。

邵雍の詩集『伊川擊壤集』は樂觀の哲学を主張し続ける。

210422 板書 No.2 擊壤歌

われらは日が出ると働きに出て、日が入れば休む。自分で井戸を掘って飲み、田を耕しては食っている。天子のおかげなど、われらには何の関係もない。(民の生活が安定して、帝王の治を意識せざるところに、かえって無限の無事太平を表現している)

【擊壤歌】堯の時代の老人の作と伝える。擊壤…大地をたたいて歌う。

210422 板書 No.3

宋の哲学の大成者、朱熹は詩人でもあり、優れた文学者でもある。

乾元中寓居同谷縣作歌七首 其七 杜甫  
 男兒生不成名身已老 男兒生れて 名を成さざるに身已に老ゆ  
 三年飢走荒山道 三年飢走す 荒山の道  
 長安卿相多少年 長安の卿相 少年 多し  
 富貴應須致身早 富貴には 応に須く身を致すこと早かるべし

帝力于我何有哉	耕田而食	鑿井而飲	日出而息	日出而作	擊壤歌 古逸
帝力我于何有哉	田を耕して食う	井を鑿って飲み	日入りて息う	日出でて作し	

杜甫の「同谷七歌」が悲哀に没入するのを批評して言う。

「杜陵の此の歌は、豪宕奇崛 詩流のうれいに及ぶ者少し。しかるに 其のおわりの章に、老いを嘆き 卑しきを嗟くは、則ち志 亦た陋なり矣。人以て道を聞かざる可けん哉。朱子のいわゆる「道」とは、人間を微少な存在とは見ない哲学をいう。